

# 想うがままに

## 革命やらんとあかん

本誌編集委員 小寺山康雄

小泉が衆議院を解散し、総選挙に打って出た八月八日、ぼくは友人夫妻のツアコンでイタリアに里帰りしていた。ツアコンは今回で四回目だが、美術館、博物館、教会など教養を必要とする案内は女房殿に任せ、花より団子のぼくはボールとリストランテの手配をするのがいつものパターンである。

### 解散の日は里帰り中

まだ現役勤め人の夫妻は一日間しか休暇がとれないというので、ぼくらが先に出発し、夫妻を日本に送り出し

てから湖水地方とスイスを廻って帰るという日程にした。夫妻のイタリア滞在は九日間しかないので、屋根瓦も市民の政治意識も真っ赤っ赤の「赤い街」ポローニャと、ぼくが愛してやまないヴェネツィアの二都市だけをゆっくり滞在することにした。

ポローニャの市庁舎の壁にびっしり埋め込まれた数千人のレジスタンスの無名の英雄たちのレリーフと、いまだに絶えない市民の献花。ポローニャから日帰りで行ったモザイクの街ラベナ。そしてわが愛するヴェネツィアで

の六連泊。二人は「こんなのにのんびりした時間をすごせたのはいつ以来だろう。命の洗濯とはこれだったんだ」と、めっちゃ喜んでくれた。ひよっとしたらツアコンの才能があるのではないかと、悦に入っていたら、女房から「誰がコンダクトしたん？二日に一日は二日酔いでシェスタ（昼寝）してたくせにと、痛いところをつかれてしょげ返ってしまった。

夫妻とポローニャで合流したとき、八月九日付けの新聞（なぜか『産経新聞』）を持ってきてくれたのだが、政局

より死のロード中のタイガースのほうが気になっていたのは「どうせなら『サンケイスポーツ』の方がよかったのに」と思わず言ってしまう、夫妻には呆れられ、女房には馬鹿にされた。

楽しい里帰りから戻ってきたのは告示の二日前。タイガースはそれから勢いづいたが、総選挙は惨憺たる結果だった。タイガースがいなければイタリヤに引き返したいと思うぐらいである。

### 卓越した人心収攬術

小泉は練りに練った戦略戦術を立て、周到な準備をあらかじめしていたのではないが、造反に対する条件反射的対応や思いつきだけで勝負に出たのではない。参議院での敗北が中曽根根文の造反宣言で明らかになった時点で、小泉は衆議院解散・総選挙の大博打にうって出る決意を固めたにちがいない。

党内の反対派を押し切ったの衆議院

解散、造反組の徹底排除と女性を中心とした対立候補の擁立、学者・タレント・IT長者など話題性のある候補者の登用。マスコミがとびつきのに充分な仕掛けであり、ポピュリスト小泉の面目躍如たるところである。不意打ちを喰らった造反組、民主党とその他の野党は右往左往するばかりであった。勝負は始まる前からついていたのだ。

毎回、「自民党凋落」を呪文のように唱える政治評論家、予想がはずれること競馬新聞以上の政治学者などは、「自民惨敗、民主躍進」の卦を立てていたが、告示後、日を追うにつれ黙ってしまうか、知らぬ間に算木を並べ替え、卦を立て直した。

かくて自民党は圧勝したが、それは自民党の党としての勝利というよりも、稀代のデマゴグ小泉の卓越した人心収攬術の勝利であった。

小泉政権下で国家財政の赤字は二四〇兆円増え、七八〇兆円にもふくれあ

がったが、その要因は郵便局が公社であったからではない。民営化すれば赤字が解消するかのようには、本末転倒の詐術的議論である。無駄な公共事業や特殊法人に郵貯や簡保資金を注ぎ込んできたのは、小泉政権を含む歴代自民党政府であり、小泉はその改革に何ほどのこともしてこなかった。

「郵便局だけがどうして公務員でなければならぬのか」と、小泉は四〇万人近い郵便労働者の賃金はあたかも税金で賄われているかのようには有権者に錯誤させたが、郵便労働者の賃金は全額公社負担であることは小泉自身が一番知っていることだ。しかも、その内の一二万人は低賃金・不安定・無権利の非正規労働者である。

有権者はいとも簡単に小泉のデマゴギーに幻惑された。しかもマスコミは小泉の詐術に意識的に目をつぶっていた。逆に、有権者はマスコミの煽情的報道によって特殊法人や各省庁、大阪

市などの「役人天国」の実態を知って憤激していた。くわえて、解雇、強制配転・出向、賃下げ、長時間労働に怯え苦しんでいる都市労働者や就業の機会すらままならない若者たちは、現状への不満と苛立ちを小泉の詐術的改革に幻想することによって解消しようとした。彼ら、彼女らにとって「郵政民営化」は今日では「正義」と見られている反公務員のシンボルであったのだ。

## 九・一一悪夢の日

○五年九月一日は、○一年九月一日がイスラムの民にとってそうであったように、この国の無告の民にとっては悪夢の始まりとして長く記憶されるだろう。

四年前、小泉は「自民党をぶっ壊す」ために総理総裁になったはずだが、ぶっ壊したのは無告の民の暮らしであった。労働者の所得は年々減少し、逆に、低賃金不安定雇用は年々増加してい

る。所得上位二〇%の金持ちと所得下位二〇%の貧乏人の所得格差は九〇年代初めの二〇倍から今や一六八倍になった。大企業は減税と人件費削減で史上最高益を記録し、八二兆円もの金だぶついている。

生活の苦しさを訴える世帯は半数を越え、自殺者は年間三万人を超えたまま推移しているのに、投票日の翌々日、谷垣財務相と石政府税調会長は口をそろえて増税をぶちあげた。軍事、大企業、銀行にとっては依然として「大きな政府」だが、無告の民にとってはますます「小さな政府」であり、小泉の「改革」は足手まといの「弱者は死ぬ」と言っているのにひどい。「福祉と平和」「弱者の党」だったはずの公明党が権力欲しさにこの「改革」をバックアップしているのだから、小泉にとってはなんとも心強いだろう。

テレビをつけると、高利貸と保険会社のCMが朝から晩まで流れている。

政府は何もしてくれないですよ。♪どうするアイフルと、いうのだ。

数十年ぶりに♪立て、飢えたるものよ、の歌詞がリアリティを持つ時代がやってきた。♪今ぞ、日は近し、とは思わないが、やっぱり革命やらなあかんとちゃうか。

【追記】九月一八日投票されたドイツ連邦議会選挙では、強硬に新自由主義的「改革」を唱えるキリスト教民主・社会同盟と、穏健に主張する社会民主党がいずれも後退した。

それに対して旧東独の民主的社会主义党と旧西独の社民党左派だったラフオンテーヌ率いる「労働と社会的公正のための選挙代案」が合流した左翼党が躍進した。ドイツの無告の民は、今や自分たちの党を持つに至ったのである。

こころやま・やすお

一九四〇年神戸生まれ。七七年～八八年、「社会主義と労働運動」誌編集長。市民の政治新聞「ACT」にコラム「いずみ」を連載中。